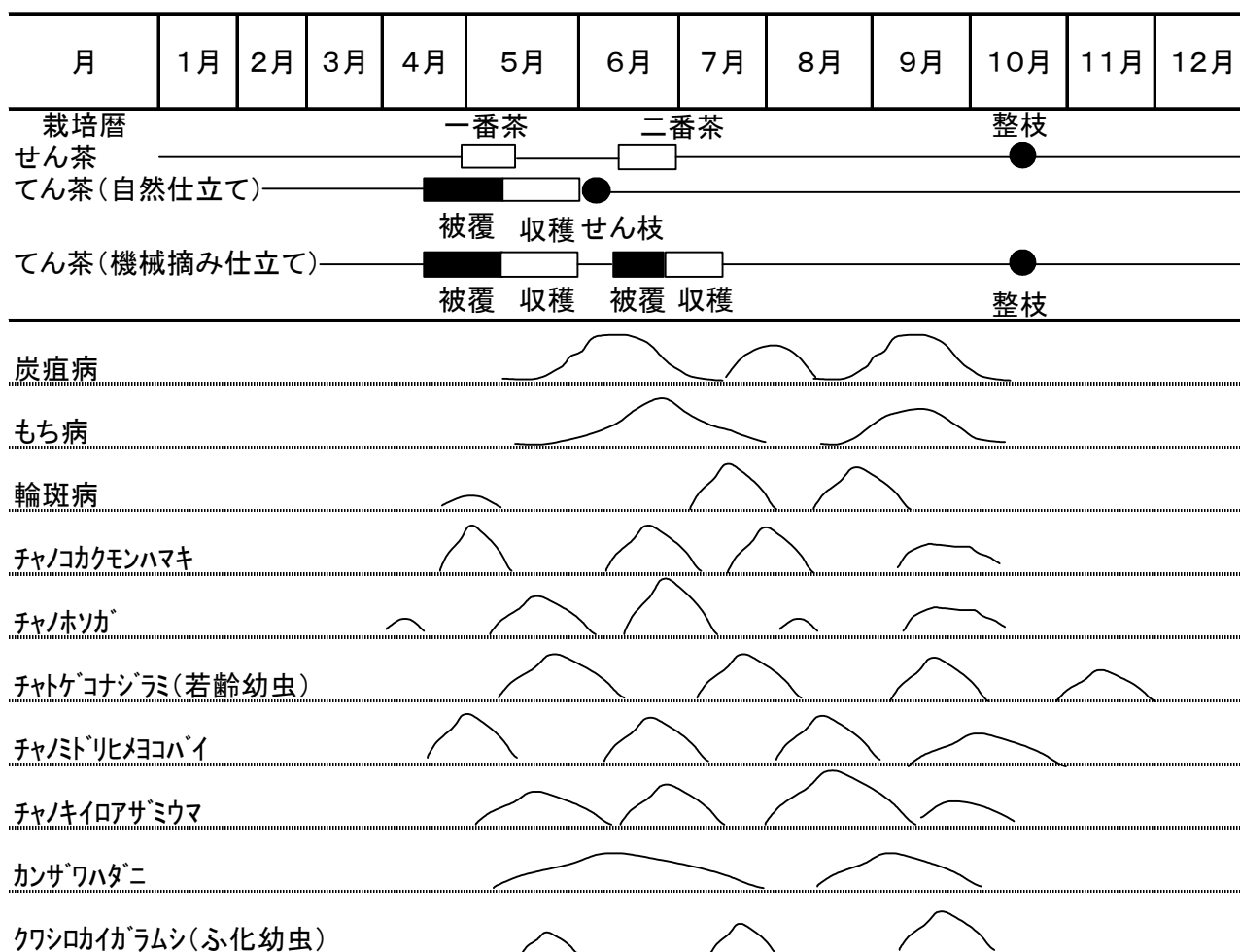


(1) チャ

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期



2 主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	
炭疽病 (<i>Discula theae sinensis</i>)	①抵抗性のある品種を導入する。 ②窒素肥料の多用を避ける。 ③茶園の日当たり、風通しを良くする。 ④多発が続く園では整剪枝で伝染源を除去する。	
	【参考事項】 平均気温22℃以上、湿度80%以上、降水量 20mm以上の条件が続くと発病しやすい。雨水で分生子が飛散し風があると飛散が助長される。潜伏期間が約20日のため、二・三番茶では発病前に摘採されてしまうことが多い。三番茶芽で病葉数1㎡当たり1000枚以下なら翌年一番茶の収量への影響は5%以下とされる。	
もち病 (<i>Exobasidium vexans</i>)	①抵抗性のある品種を導入する。 ②窒素肥料の多用を避ける。 ③茶園の日当たり、風通し、排水を良くする。 ④二番茶に多発した茶園は二番茶摘採後に整剪枝して病葉を除去する。	
	【参考事項】 担子胞子によって空気伝染する。気温15～20℃で雨が多く湿度が高いと発生しやすい。	被害葉

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	
網もち病 (<i>Exobasidium reticulatum</i>)	①抵抗性のある品種を導入する。 ②窒素肥料の多用を避ける。 ③三番茶を摘採しなければ、発生を抑制できる。 ④枝梢の枯死が多いときは一番茶摘採後に剪枝すると回復が早い 【参考事項】 担子胞子によって空気伝染する。高湿度で飛散量が多くなる。1㎡あたり病葉数50枚以下では翌年の収量へはほとんど影響しない。	
輪斑病 (<i>Pestalotiopsis longiseta</i>)	①抵抗性のある品種を導入する。 ②発生園で使用した摘採機、剪枝機は十分水洗いするか熱湯で消毒する。 ③被害葉及び被害枝条を除去する。 【参考事項】 病原菌の発育最適温度は25℃～30℃。茎、葉の破壊的な傷口から菌が感染する。	
新梢枯死症 (<i>Pestalotiopsis longiseta</i>)	①抵抗性のある品種を導入する。 ②手摘み茶園にすると発生が抑制できる。 【参考事項】 病原菌の発育最適温度は25℃～30℃。輪斑病菌が風などの物理的影響で葉が脱落するときに見える傷口から感染する。	
褐色円星病 (<i>Pseudocercospora ocella</i>)	①樹勢を衰弱させない管理に努める。 ②発生の多い茶園では茶樹の更新を行い、樹勢回復を図る。 【参考事項】 樹勢が低下すると発病しやすい。多雨多湿時に発生が多くなる。	
赤焼病 (<i>Pseudomonas syringae</i> pv. <i>theae</i>)	①激発時は整剪枝して病葉、病枝を除去する。 ②風による傷付きを防止するため防風網を設置する。 ③発生園で使用した摘採機、剪枝機は十分水洗いするか熱湯で消毒する。 【参考事項】 細菌による病害で感染には傷口と水滴が必要であるが、気孔からも感染する。	
灰色かび病 (<i>Botrytis cinerea</i>)	①花が感染源となるため着花数を少なくする。 ②着花数を少なくする方法として、三番茶の摘採、夏場の干ばつ時のかん水、夏肥から秋肥の過不足をなくす。 ③自然仕立て園では、秋期の生育停止期以降に摘心する。 【参考事項】 開花している時期に降雨が多いと、まず花に感染し、次に10～12月に葉に感染する。	
髪の毛病 (<i>Marasmius crinisequi</i>)	①剪枝を行い、剪枝くずを株内に残さない。茶園の風通し、日当たりを良くする。 ②菌糸束を除去する。 【参考事項】 菌糸束は湿潤な時期に生育が良い。摘採面に出ている場合は製茶への混入が心配される。	
黒葉腐病 (<i>Ceratobasidium</i>)	①常発地では梅雨期の被覆を避ける。 ②風通しを良くする。 【参考事項】 新葉が黒褐色に腐敗する病害で、坪状に発生し、落葉する。梅雨期の被覆栽培での発生が多い。	
チャノキイロアザミウマ	①地表面付近の土中で繭を形成するので、中耕や深耕により土中深く埋没させる。 ②近隣の常発地からの侵入を避けるためには、防虫網を設置する。 【参考事項】 密度は5月中旬から上昇し、6～7月に最も多く発生する。	 チャノキイロアザミウマ
チャノミドリヒメヨコバイ	①卵を上位2～3葉間の節間に多く産むため、摘採による除去効果が大い。 【参考事項】 4月中～下旬に第1世代成虫が発生し、二番茶期から秋にかけて発生が多くなる。冬期温暖な年や高温少雨の年に多くなる。茶樹の更新後は、被害を受けやすい。晩霜の常襲地で発生が多い。	 チャノミドリヒメヨコバイ
コミカンアブラムシ	①茶園の風通しを良くする。 【参考事項】 4月頃から新芽に寄生し繁殖する。被覆した茶園や風通しの悪い茶園で多く発生する。窒素肥料の多用は発生を助長する。被害葉で製茶すると品質が劣る。	 新芽への寄生

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
クワシロカイガラムシ	①品種により寄生程度が違い、さやまかおりは被害が少ない。 ②中切り、深刈りを行うと生息部位の環境が急変し、繁殖を阻害する。 ③樹冠内にいるチビトビコバチなどの天敵を保護する。 ④卵期にスプリンクラーで断続的にかん水することで、高温湿度によるふ化阻害が期待できる。 【参考事項】 世代が進むとふ化幼虫発生期間がばらつき防除がしにくくなるので第1世代の防除を徹底する。1月1日以降、「日平均気温-10.5℃」を積算し、287℃になった時が第一世代のふ化最盛期となる。     雄まゆ 雄まゆ 幼虫 孵化
ツノロウムシ	①中切り、深刈り更新を行い、日当たりや通風を良くする。 ②発生の多い箇所を除去する。 【参考事項】 年1回発生する。多発するとすす病を誘発する。  ツノロウムシ
ツマグロアオカスミカメ	①茶園周辺のヨモギ、アレチノギク、ギンギンなどの寄生植物を除去する。 【参考事項】 4月上旬からふ化幼虫が発生し、一番茶期の被害が最も大きい。前年の9月下旬～10月に被害を受けた茶園では特に注意する。9月上～中旬に天候が良いと発生が多くなる。
チャノコカクモンハマキ、チャハマキ	①チャノコカクモンハマキの幼虫は新葉を好むので摘採による除去効果大きい。 【参考事項】 チャノコカクモンハマキの被害は5～7月に多く、チャハマキでは秋に多発することがある。     卵塊 幼虫 雌成虫 雄成虫
チャノソガ	①産卵は必ず若葉に行い、幼虫は若葉だけを食害するため、摘採により除去される。 ②摘採前に巻葉が見られたら早めに摘採し虫糞が混入しないようにする。 ③黄色高圧ナトリウムランプを点灯する。 【参考事項】 一・二番茶期及び秋に発生が多い。一番茶期で摘採の遅れる園や覆下茶園では発生に注意する必要がある。巻葉混入率が2%以下は製茶品質に影響しない。
ヨモギエダシャク	①天敵（鳥、ハチなど）による除去効果大きいので、天敵の寄りやすい環境をつくる。 ②周辺の樹木、放置した被覆資材に産卵するので産卵場所を除去する。 【参考事項】 ふ化幼虫は葉裏にいて表皮だけ残して茶葉を食害するが、成長すると表裏かまわず食害し、時には新梢まで食害する。秋期の被害が大きい。  ヨモギエダシャク

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	
チャドクガ	①幼虫が集合している時期に茶葉ごと取り除く。 【参考事項】 毒毛があり、卵塊、幼虫、成虫に触れるとかぶれる。  チャドクガ	
カンザワハダニ	①水をやや高圧にして葉裏に散布すると密度を低下させる効果がある。 ②連続した降雨により密度が減少する。 ③夏期の高温・乾燥条件で多発しやすいので、必要により灌水を行う。 ④品種により寄生程度が違う。 【参考事項】 凍霜害を受けると多発することがある。窒素肥料の多用は発生を助長する。寄生葉率が10%で中発生、30%で多発生である。新芽で10%未満では収量への影響はないとみられる。   雌成虫、幼虫、卵 被害葉	
チャノナガサビダニ	【参考事項】 やや成熟した若葉の葉裏を加害し、被害が激しいと葉色が茶褐色に見える。	
チャノサビダニ	【参考事項】 晩秋から早春に発生する。 新芽より古葉に多く葉の両面を加害し、被害が激しいと葉色が暗褐色に見える。	
チャノホコリダニ	①機械摘み園では、10月上旬～中旬の整枝により、発生は著しく減少する。 【参考事項】 被害が激しいと葉色が黒みの濃い褐色に見え、甚だしいとかすり状に見える。 茶芽上部の未熟な若葉に寄生するものが多く、覆下園、幼木園に発生が多い。	
チャトゲコナジラミ	①一番茶の摘採後に深刈りを行い、寄生葉を除去する。 【参考事項】 成虫は新芽に群がる。卵は新葉及び古葉の裏面に産下される。幼虫は甘露を排出しすす病を誘発する。 侵入を早期に発見するには茶園周辺部のすそ部に着生する古葉の裏面を観察する。	
土壌線虫(チャネグサレセンチュウ)	①くぼ地の排水不良箇所に多いので排水を良くする。 【参考事項】 葉層が薄く小葉傾向になり着花が多くなる。加害部位は根の表皮下で内部寄生性である。根には黒斑ができる。	